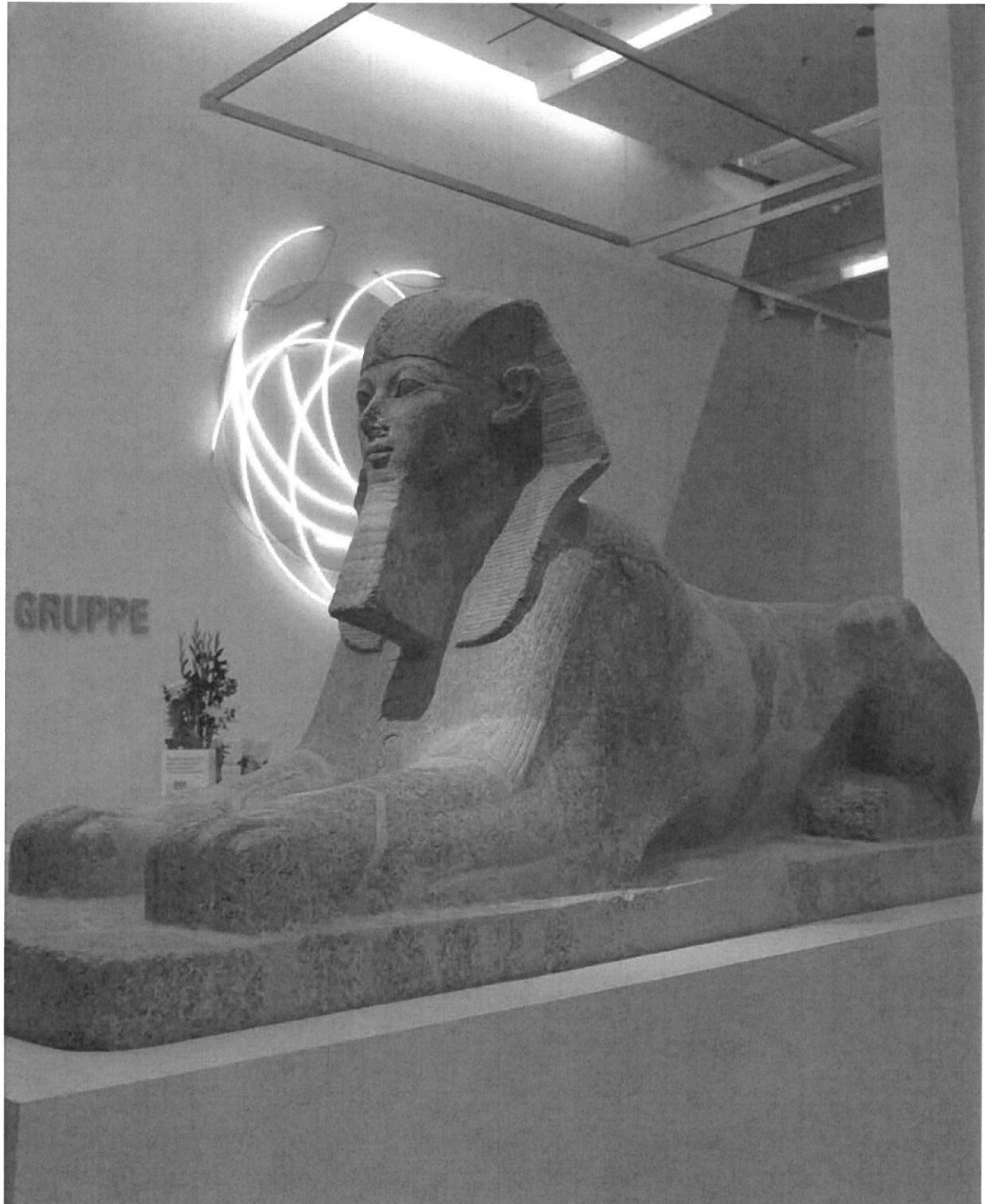


一般社団法人
日本新聞製作技術懇話会
会報 (隔月刊)
VOL.48 No.2
2024.3.1
(通巻 283号)
禁転載

CONPT

Conference for Newspaper
Production Technique-Japan

広報委員会編集
編集人 下平 泰生
東京都千代田区内幸町
日本プレスセンタービル
8階 (〒100-0011)
電話 (03) 3503-3829
FAX (03) 3503-3828
<http://www.conpt.jp>



目次

CONPT TOUR2024紹介	3	
新聞製作技術の軌跡 Additional File	朝日新聞社OB 立花 敏明	5
楽事万才	日本ボールドウィン Newspaper事業部部長 三木 幸一	7
page2024報告	8	
第39回新聞製作人新年合同名刺交換会	10	
美味あっちこっち	岩手日報社 総合メディア局次長 村田 崇	11
わが職場あれこれ	静岡新聞総合印刷 生産管理部部長 前田 洋志	12
CONPT日誌	12	

- 表紙写真提供：CONPT TOUR アーカイブ（ドイツ・ベルリン）
- 表紙製版：(株)デイリースポーツ
- 組版・印刷：(株)デイリースポーツ

CONPT-TOUR2024紹介

drupa視察、新聞社・印刷工場を訪問

日本新聞製作技術懇話会は日本新聞協会の協賛を受け、ドイツ・デュッセルドルフで開催される国際印刷・メディア産業展drupa2024の視察を中心とした欧州新聞事情視察団(CONPT-TOUR2024)を5月30日(木)～6月6日(木)の日程で派遣する。

今回の訪問地はドイツとベルギー。ドイツではdrupa視察に加え、フランクフルトで新聞社フランクフルター・アルゲマイネ・ツァイトンク(F.A.Z)を訪問、ベルギーでは首都ブリュッセル北東の都市ベリンゲンにあるワールドセット・プリンティング・パートナー



ズ社の印刷工場を見学する。

また、世界の新聞最新事情をテーマに、WAN-IFRA（世界新聞・ニュース発行者協会）のIngi Rafn Olafsson氏(Director, World Printers Forum)による講演会を予定している。

CONPT-TOURは2019年に実施して以降、翌年からは新型コロナウイルス感染症の拡大のため中断していた。



2016年のdrupa会場(デュッセルドルフ)

【drupa2024】

drupa（ドルッパ）は、4年に一度デュッセルドルフで開かれる世界最大規模の総合印刷機材展である。前回は2020年に開催が予定されていたが、コロナ禍の影響で、翌年に「virtual.drupa」と名付けたオンライン展示会が開かれた。リアルでの開催は2016年以来、8年ぶりとなる。

「ウイ・クリエイト・ザ・フューチャー」をメインテーマに世界50カ国の企業が出展、日本企業は46社で、中国、ドイツに次ぐ第3位の出展規模となる。最大展示スペースを確保したHPは、17ホールに6,000㎡の規模となる。

2016年開催のテーマは「タッチ・ザ・フューチャー」だった。未来を“タッチ”から“クリエイト”へ——8年の間隔をおいて蓄積・深化した技術が展示される。

今回のdrupaでは持続可能性、循環型経済、デジタル化、資源／エネルギー効率、Print4.0／Finishing4.0、人工知能、プラット

<CONPT-TOUR2024 主な予定>

【新聞社訪問】(フランクフルト)

▽フランクフルター・アルゲマイネ・ツァイトウング =5月31日

【展示会視察】(デュッセルドルフ)

▽国際印刷・メディア産業展 drupa2024 =6月1日(2日:希望者)

【印刷工場訪問】(ベリンゲン)

▽コールドセット・プリンティング・パートナーズ =6月3日

【講演会】(場所・日時は調整中)

▽講師はWAN-IFRA Director I.R.Olafsson氏 世界の新聞最新事情をテーマに

フォームエコノミー、コネクティビティに焦点があてられる。

【F.A.Z.】



Frankfurter Allgemeine Zeitung (F.A.Z.=フランクフルター・アルゲマイネ・ツァイトウング)は1949年11月1日にドイツ・フランクフルトで設立された。社名は「フランクフルト総合新聞」を意味する。

F.A.Z.はドイツで最も著名な新聞社のひとつであるが、近年、印刷部数の急激な減少に直面している。

印刷部数は約10年前のほぼ半分にまで減少した一方で、デジタル購読者が増大した。このデジタル化を支えているのが、デジタルサブスクリプションアプリである「F+」である。「F+」が成長ドライバーの役割を果たし、契約数は12万件を超え(2022年10月)、現在も拡

大し続けている。

【Coldset Printing Partners】



Coldset Printing Partners (コールドセット・プリンティング・パートナーズ)は、ベルギーのメディアグループであるコレリオとコンセントラの合併会社として、2010年に設立された。この2社は2013年にMediahuis (メディアハウス)となり、これまでに複数の新聞を吸収して事業を拡大している。

Coldset Printing PartnersはMediahuisの印刷部門として、ブリュッセル北東のベリンゲンに工場をもち、ベルギーの日刊紙Het Nieuwsblad (ヘット・ニューズブラッド、英語でThe Newspaper)を始め50万部以上の新聞と雑誌を印刷している。

湿し水を使用しない水なし印刷方式を採用し、KBAのコマンダー3セットとコルティナ2セットの印刷設備を保有している。

CONPT-TOUR2024紹介

新聞製作技術の軌跡

Additional File

- 長期連載「新聞製作技術の軌跡」は2022年11月号で終了しましたが、読者の皆様から要望・提案が寄せられました。新たに「もう一つの軌跡」を随時レポートします。

集配信システムの始まり

集配信システム(正確には記事原稿集配信システム)は事務計算以外で初めて新聞社に導入されたコンピューターシステムであり、コンピューター技術者を育てたシステムでもあった。

集配信システムは①電気信号に変換された原稿を受信し②磁気ディスクに保存③高速の漢字プリンターに出力し④全自動モノタイプ(活版の場合)、あるいは全自動写植機のサプトンや電算紙面編集システムへ、さん孔された紙テープまたは電気信号の形で原稿を送るシステムである(全国紙などでは他本社にも送る)。後に⑤ディスクに保存された原稿の訂正機能が追加された。このため集配信システムは大組みシステムのフロントエンドプロセッサとも呼ばれる。現在では素材管理システムの一部である。

富士通の集配信システム

<朝日大阪の高速漢電システム>

記者の書いた原稿はさん孔機で紙テープ化される。また通信社からの配信原稿も紙テープ化される。これを目に見える形に印字するため(当時は翻訳という言葉が使われた)、機械式の漢字テレタイプ(漢テレ)が新興製作所や沖電気で開発され、全国の新聞社に普及した。その能力は1分間に約120文字である。しかし、漢テレは機械式のため、騒音がひどい、文字化けが多い、印字速度が遅いなどの欠点があった。また、印字できる文字数が限られた。

富士通と朝日大阪は、1968年(昭和43)10月、小型コンピューターFACOM270-20に静電印

刷方式で、1分間に1500文字を印字する高速漢字プリンター(F 6501A)を接続するシステムの使用を開始した。振り返ってみると、このシステムが集配信システムの始まりである。

FACOM 270-20は小規模な科学技術計算とリアルタイムな制御処理(プロセス制御)に適用分野を絞って開発されたコンピューターで、主記憶のコアメモリはたったの8KW(1W=16ビット)。容量が小さいため既製のモニタープログラム(OSのことは使用せず、特別に開発されたものが使われた。内蔵磁気ドラムの容量も小さく、131KW。ここにプログラムと横15×縦18ドットの270ドットの文字パターンが2,688字収容されている。

このシステムは原稿を複数から入力しても、急ぎの指定のある原稿を優先して印字するなど、コンピューター利用ならではの機能が付け加えられた。当初は原稿の保存は行わなかったようだ。

このシステムは改良が加えられ、朝日の東京(70年)、名古屋、西部に順次導入された。ただし、名古屋と西部は予備を持たない1システムであった。

朝日に引き続き、中日(70年)、読売の東京と大阪(ともに72年)が富士通のシステムを導入している。

<訂正機能の追加>

活版工程で大組みの場合、原稿の訂正は手作業でいつでも簡単に対応できる。そのため、集配信システムに原稿訂正機能がなくても困らない。

しかし全自動写植機や電算紙面編集システムに原稿を送り込む場合、その前段の集配信システムに訂正機能が必須だ。78年6月、富士通と朝日東京は訂正機能を持つ漢字ディスプレイ(F6580C)を接続した新しい集配信システムを開発。これによって朝日東京はニュース面のNELSON (IBMのシステム)移行を開始した。

東芝の集配信システム

＜日経の入力・モニターシステム＞

朝日より少し早く電算紙面編集システムのANNECS (IBM)の実用化を目指していた日経は、73年(昭和48)、東芝のミニコンTOSBAC-40Cを使用した高速漢字プリンターシステムを導入し、東京ニュース通信からのラテ番組と共同からの原稿の印字を行った。ミニコンに接続された漢字プリンター (KF-3000)の印字速度は、1分間に600行と超高速だ。この日経の「入力・モニターシステム」が東芝の集配信システムの第1号である。

ただし、このシステムに訂正機能はない。訂正はゼネラル(現在、富士通ゼネラル)の「訂正システム」が行う。訂正システムはミニコンNOVA01Jと訂正端末で構成されている。ミニコンの負荷を減らすため、端末は端末側のマイクロコンピューターで制御された。今では当たり前だが当時は最先端技術だった。

＜地方紙が続々導入＞

共同は73年度下期からニュース配信を電算化し、送信速度を50ボーから200ボーにスピードアップすることを決定した(実際は遅れて75年から)。これにより、受信社で原稿の印字が滞る恐れが出てきた。そこで高価だが高速印字ができる集配信システムが目玉された。地方紙で最初に東芝の集配信システムを採用したのは京都で、75年に稼働した。漢字プリンターは改良型(KF-4000)である。導入当初は1システムで運用、79年に2システムになった。

その後も東芝の集配信システムを採用する地方新聞社は増え、77年12月の日本新聞協会の調査では、北海道、福島民友、中日(名古屋＝富士通から変更・東京)、京都、神戸、四国が導入している。

＜訂正機能の追加＞

東芝も原稿訂正機能の必要性に気が付いて、73年9月に開催された新聞製作技術展(JANPS)で東芝はミニコンTOSBAC-40Cと

訂正端末で構成する新聞原稿校正システムを発表した。このシステムはディスプレイで訂正作業のすべてを行うのではなく、タブレット方式であった。印字されたモニター紙をタブレット上に置き、訂正すべき原稿上の個所をペンで指示する。

大組みにサプトンを導入した日経大阪は75年に東芝の集配信システムを導入したが、少し遅れて、このタブレット式校正システムを導入した。

原稿訂正の本命は原稿をディスプレイ(VDT)に呼び出して目で確認しながら原稿を訂正するもの。75年に東芝の集配信システムを導入した北海道は、サプトンで大組みをするため、78年、東芝のTOSBAC-40Cによる訂正システム(北海道では校正・二次ファイルシステムと呼んだ)の使用を開始した。

東芝はその後、訂正端末のインテリジェント化を行い、集配信と訂正のミニコンの統合を進め、ここに本格的な集配信システムが完成した。

コンピューター技術者を育てた集配信

活字で大組みを行う活版時代から電算紙面製作システムに移行する際、集配信システムはそれに先立って導入される場合が多かった。まだコンピューターとは無縁だった新聞社にとって初めてのコンピューターだった(事務用コンピューターは除く)。集配信システムを扱う技術者が後の電算紙面編集システムの導入の中心となったケースが多い。また、集配信システムはコンピューターとは何かの教材となった。

集配信システムが果たした役割は本来の役割だけに留まらず、非常に大きかったと思う。

【参考文献】

- ・FUJITSU (富士通)
- ・東芝レビュー (東芝)

朝日新聞社OB 立花 敏明

楽事万歳

我が家の犬と猫の話

日本ボールドウィン
Newspaper 事業部部長

三木 幸一

近場のショッピングモール内にペットショップがあり、販売されている子犬を見るだけで癒されるので、モールに行くときはよく立ち寄ります。そこには販売とは別に里親探しのコーナーがあります。

多くの犬は数週間で里親が見つかり常時入れ替わっていますが、2年もの間里親が見つからない犬がいました。

気になっていたのである日、面会させてもらおうと大変人懐っこく、あまりのかわいさに一目ぼれのような状態になってしまいました。すぐに里親に申し込みトライアルに入るとなぜこの犬だけが2年もの間里親見つからなかったのかすぐにわかりました。

うなり声を上げながら足に抱きついて腰をヒクヒク動かすマウント行為が激しく、これが四六時中続くのですからたまりません。子供のいる家庭ではとても迎え入れることはできないでしょう。

犬の訓練に詳しい会社の上司に相談すると、『マウントしたら口を両手で掴んでヒーというまで離さなければすぐにやめるよ』と教えてもらいました。試してみるとその通り、すぐにマウント癖はなくなりました。里親コーナーにいる時からの『りく』という名前をそのままに正式に我が家の一員となりました。散歩が大好きで3時間でも4時間でも歩き、直後の散歩定刻時間になると催促します。

大変人懐っこく、牛のような白黒柄なので覚えてもらいやすいのか、散歩中には遠くからでもおばちゃんの『りくちゃん!』の声が届きます。

散歩以外の時間は『不機嫌なおじさん』みたいな顔をしてダラダラと寝そべるのに、散歩とごはん・おやつの間になると別人(別犬)のように目を輝かせて催促します。時間の感覚は非常に正確なので不本意ながらも規則正しい生活が送れています。

*

ある夏の暑い日に仕事から帰るとリビングに置かれた段ボールの中に真っ黒な子猫がいました。抱き上げると口だけ『にゃー』と動きましたが声は出ませんでした。

妻の話では、りくが散歩中に見つけ、最初はゴミの塊だと思ったけどよく見ると動けない子猫だったとのことでした。

弱っていて顔や体中得体のしれない体液でガビガビになり声も出せない状況でした。

拾ってしまった以上、これも何かの縁と思い家族に迎え入れました。

妻は女優の永野芽郁

さんみたいにかわいくなって欲しいとの願いから『めい』と名づけました。めいはほどなく元気になり、家中をひっかきまわすわ、りくに猫パンチを喰らわすわ、やりたい放題の時期を1年ほど過ごし今では少し落ち着きました。

野良猫の血を引いているからか、野性味そのままの目つきや仕草が残っています。

永野芽郁さんみたいにかわいくなる日が訪れることは諦めましたが、一緒に寝ていると何とも言えない幸福感をもたらしてくれます。りくとめいに癒される毎日を送っています。



この目…。なんとも癒やされる

公益社団法人日本印刷技術協会(JAGAT)が主催する第37回page2024が2月14日～16日の3日間、東京・池袋のサンシャインシティ・コンベンションセンターで開かれた。

新型コロナウイルス感染症が第5類に認定されてから初めての開催となる今回は148社が447小間を出展した。来場者数は3日間合計

で21,580人となり、昨年の17,070人を4,510人上回った。

今回のテーマは「連携」で、昨年のテーマ「創注」に続くものだ。仕事を創り出す次のステップとして、企業同士が「連携」することで、経営資源の壁を乗り越え、様々なビジネスの可能性が生まれることを表現している。

page2024 「連携」をテーマに 報告



【展示会の概要】

リアル展示会に加え、カンファレンスとセミナー、基調講演がオンラインライブ配信された。新企画としては、展示コーナーとセミナー会場で構成した「連携ゾーン」が設けられ、印刷ビジネスと親和性の高いデザイナーやクリエイター、スタートアップ企業、ベンチャー企業が出展した。

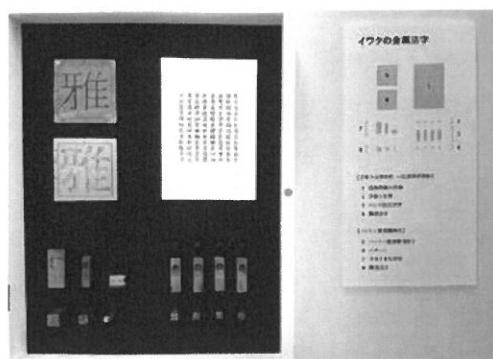
次回page展は2025年2月19日～21日に同所で開催される予定である。

【出展社・製品紹介】

▼イワタ

「文字とともに100年」をキーワードに、従来の書体ライブラリーの展示に加え、金属活字の製作方法を紹介した。

1920年の創業当時は、柘植などに手彫した父型を基に活字の母型を作っていた。その後登場したベントン彫刻機では、亜鉛版で作っ



た文字パターンの凹みを針でなぞると、連動するドリルで真鍮の部材にパンタグラフの原理で、文字を縮小彫刻し活字の母型が完成する。縮小率を変えることで、サイズの異なる母型を作ることができ、手作業に比べ、生産性が格段に向上したという。

▼コダック

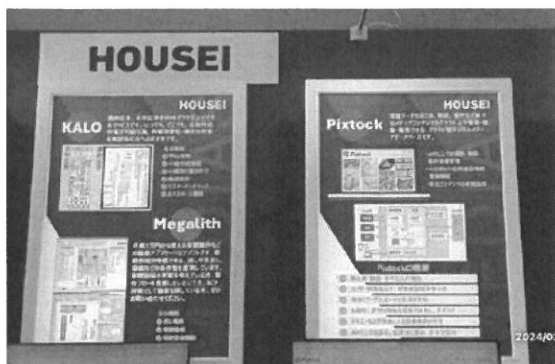
印刷会社を支援するデジタル印刷、ワークフロー、CTPについてのソリューションを紹介した。

プレートセッターTRENDSETTER Q400で出力したプロセスフリーで視認性に優れるプレート「SONORA XTRA」を展示。さらに同セッターで出力した三菱製紙製の製版用サーマルレーザーフィルムを紹介した。

▼HOUSEI

DTP組版システムMegalith（メガリス）、新聞社向けクラウド型統合編集システム

NOVO（ノヴォ）、黒枠広告・文字広告をWebブラウザだけで作成するKalo（カロ）、写真・動画管理サービスPixtock（ピクストック）、顔認証ソリューションを展示した。



Pixtockは写真・動画を一元管理出来るサービス。入力された写真などの素材はAIによる自動解析で付加されたタグをもとに各種の検索が可能となる。

WelcomIDアルコールチェッカーは運転者のアルコールチェックと記録の保存に対応する顔認証ソリューション。顔認証により本人を照合、なりすましを防ぎ、計測したデータを自動保存することで、手書きや入力などが不要で、効率的な記録・管理が可能となる。

▼富士フイルム グラフィックソリューションズ (FFGS)

「デジタルプレス&オフセットの連携戦略で新たなチャンスをつかもう」をテーマに、デジタル印刷機とオフセット印刷機を効果的に併用することで生産のムダをなくし、人や設備の有効活用を実現するソリューションを紹介。

富士フイルムビジネスイノベーション製オンデマンド・デジタル印刷機「Revoria Press PC1120」の実機を稼働展示した。同機はワンパス6色のプリントエンジン、CMYKトナーに加え最大2色の特殊トナーを搭載できる。

高精細な再現力を活かしてスプリットライオンやマイクロテキストを入れた偽造防止印刷による金券チケットのサンプルや、品質安定



性や見当精度を確認できる1,000枚連続出力のサンプルなど、オフセットと遜色ない品質と安定性を体感できる多種多様なサンプルも展示。

「FFGS QC Navi（仮称）」はデジタル印刷機とオフセット印刷機の色品質を統一するソリューションで、ジョブ振り分けの自由度が高まり、工程全体の効率アップに寄与する。

▼コニカミノルタ ジャパン

「変化に応えるプリントビジネス ～紙とデジタルの共創～」をテーマに、生産プロセスの効率化、印刷物の価値向上、SDGs支援のポイントから出展した。

生産プロセスの効率化では、大容量封筒フィーダーをデジタル印刷機「AccurioPress C4080」に連結し、自動品質最適化ユニット「IQ-501」により検品作業の軽減をはかっている。

SDGs支援ではAccurioPressカーボンオフセットサービスを紹介した。AccurioPress導入に際し、用紙以外の使用する資材の全ライフサイクル(素材、製造、物流、使用、廃棄)で排出されるCO₂量をカーボンオフセットしたCO₂実質ゼロの印刷機として導入するサービスである。

▼SCREEN GPジャパン

再調色できる色評価用直管LED照明「Tino4000RA98P」を色評価環境ソリューシ

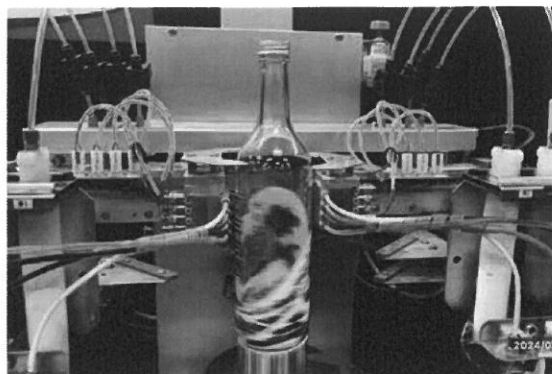
ョンとして展示。業界初の再調色機能を搭載することで、波長の再調整が可能。従来の色評価用蛍光灯の課題だった、経年劣化による分光分布の乱れを解決でき、長期間にわたって最適な色評価環境を維持できる。

遠隔立会システム「TrueColor」はクライアントの印刷工場での立会確認で発生する移動によるコスト、時間のロスを解決する。色見台で撮影した印刷物と色見本を画像化し、色変換プログラムでiPad上に同じ色を再現するシステム。オンラインで画像を共有することで、現地立会いが不要となりクライアントの移動コスト削減と時間短縮に寄与する。

▼リコージャパン

「RICOH BUSINESS BOOSTER」のビジネ

スコンセプトのもと、「RICOH Pro C9500」と「RICOH Pro C7500」の展示を中心に創注を提案した。



ボトルプリンターコーナーではボトル全周にわたりダイレクトにプリントが可能な「NNB35150」のデモを行った。ガラス瓶、アルミ缶など様々な素材にインパクトのある印

4年ぶり新聞製作人新年合同名刺交換会

日本新聞協会と日本新聞製作技術懇話会(CONPT)が共催する第39回新聞製作人新年合同名刺交換会が1月12日、日本プレスセンター10階大ホールで開催された。4年ぶりとなる今回は、新聞社関係55社100人、会員社関係33社139人が参加し、新聞協会、CONPTの事務局を加えた242人が一堂に会した。

田中周新聞協会技術委員長(日経新聞)は多くの参加者の前で、「新聞業界、新聞製作業界に、これだけの熱気があることを、肌で感じられ、心強い気持ちになった。昨年は人員不足や物価上昇、メーカーの体制縮小など多くの課題に直面した。今年もこれらの課題が続くと思われ、物流の2024年問題など構造的な課題も存在する。しかし、新聞製作業界は常に新たな挑戦を続け、品質の高い新聞を読者に提供し続けることが使命であり、誇りである。業界全体が協力して課題に立ち向かい、2024年が良い年になることを願っている」と述べた。

続いて挨拶に立った清水英則CONPT会長は、「JANPS2024の開催見送りは会員社の出展意欲の低下が最大の要因であることをしっかり受け止めなくてはならない。しかし、新聞



挨拶する清水会長

業界に技術情報を発信したいという意欲が低下したことでは決してない。新聞社に最新、最適な技術を提供し、共有できる機会を設けることはCONPTの至上命題として変わることはない。CONPTは2025年、設立50周年を迎える。今年は節目を前に、大きく前向きな転換期となるよう努めたい」と決意を語った。

中村正純新聞協会技術副委員長(産経新聞)の発声で乾杯、和やかな雰囲気の中で懇談し、並田正太CONPT副会長の中締めの後、お開きとなった。

刷が可能。

▼山櫻



東北を支援する東北コットンCoCシリーズを紹介。東北コットンプロジェクトでは、東日本大震災の津波による塩害で稲作等が困難になった農地で綿(コットン)を栽培し、紡績・商品化・販売までを一貫して行っている。

同プロジェクトで栽培された綿の茎から採った繊維を原料のパルプに加え紙を生産、封筒や名刺として商品化することで栽培農家の

復興への挑戦を支援している。

▼ハイデルベルグ・ジャパン

新しい高精細スクリーニング「マルチドット」を紹介した。



ひとつの網点を微小なドットの集合(マルチクラスター構造)で表現する技術で、インキ使用量を20%削減できるという特長がある。AMスクリーニングの一種であるが、ロゼッタパターンやモアレの低減が期待できる。

元祖じゃじゃ麺白龍本店 (岩手・盛岡市)

辰年にふさわしく白龍(パイロン)を紹介します。昭和28年創業、盛岡城趾や岩手日報本社に近い情緒ある界隈で「ソウルフード」の店として長く愛されており、私も40年以上通い続けています。最近では盛岡市がNYタイムズで「世界で行くべき都市第2位」にランクされ、海外客も多いです。

今回ご紹介するのは「ろうすう麺」。盛岡3大麺(※)のひとつ「じゃじゃ麺」は多くの店で提供されていますが、ろうすう麺はここ本店だけ。

じゃじゃ麺は独特の平麺に具材やショウガ、ラー油などをかけて食べますが、こちらは一见ラーメンスタイル。じゃじゃ麺と同じ喉越しの良い平麺がショウガの効いた醤油スープや具材(豚肉甘辛煮、メンマ、キュウリ、ゆで玉子)と合まって、あっさりした旨味があとを引きます。

自家製の水餃子もおすすすめです。つるっ



ここだけの味



とした食感の餃子を自家製ラー油などの薬味を添えて。ビールにピッタリです。

もちろん元祖じゃじゃ麺も超おすすすめ。4月の盛岡城趾は桜の名所、花見がてらには是非お立ち寄りください。

※盛岡冷麺、盛岡じゃじゃ麺、わんこそばの総称

岩手日報社 村田崇

美味あつちこつち

あれ
これ
わが職場

ハワイへ転勤

静岡新聞総合印刷 生産管理部部長 前田 洋志

静岡新聞社の100%子会社であるハワイ報知にTKS社のジェットリーダーが導入されることになり、2014年から約3年半の間、ハワイで仕事をしていました。

赴任前の短い間で、導入される機械の研修や受託先との打ち合わせをこなし、その上、VISAの取得が難航し、バタバタの日々を過ごすこととなりました。肝心の英会話については身につけるヒマありませんでしたが、さすがハワイ、日本語が通じる所が多く助かりました。

日本の新聞を受託印刷していたことから、早朝4時に出勤して印刷開始。時差の関係から印刷した新聞の日付はハワイより1日進んでおり、未来の新聞を印刷しているような感覚でした。当時来客があると、世界で最も早く配達される新聞と説明していたものです。この生活を3年半、おかげで早寝早起きの習慣が身につきました。

赴任期間中の2014年にはCONPTツアーにハワイが組み込まれ、ハワイ報知も大勢の参加者の方々に見学して頂きましたが、早朝からお付き合い頂きありがとうございました。

帰国後、世界中でコロナ禍が吹き荒れ、観光が主要産業のハワイにも大きな影響がありました。自社発行の日本語新聞として110年の歴史を誇るハワイ報知も、昨年末に惜しまれつつも廃刊となりました。

現在は再び静岡新聞総合印刷への出向となり、ハワイと同じくさまざまな新聞社からの受託印刷に携わっています。ハワイと静岡での貴重な経験を生かし、今後の新聞発行において何ができるか考えていきたいと思っています。

CONPT 日誌

- 11月9日(木)クラブ委員会(出席6名)
広報委員会(出席4名)
- 13日(月)技術対話部会(出席7名)
- 16日(木)第131回技術懇談会=徳島新聞印刷センター見学、13名参加
- 21日(火)第17回理事会(出席6名)
評議委員会(出席7名)
- 12月11日(月)第3回年末全体会議(於日本記者クラブ・会見場来賓3氏
会員社26社37名出席)
第18回理事会(出席9名)
懇親会(於日本記者クラブ・大会議室、26名参加)
- 1月12日(金)第39回新聞製作人新年合同名刺交換会(於日本プレスセンター、239名参加)
- 2月15日(木)広報委員会(出席7名)
- 19日(月)企画委員会(出席8名)
- 22日(木)クラブ委員会(出席8名)

27日(火)第20回理事会並びに2月度評議委員会(出席11名)

◇本誌に連載しました「新聞製作技術の軌跡」全29回を一冊にまとめました。購入方法は、CONPTウェブサイトでご案内しています。
<http://conpt.jp/kisekibook.html>



定価2200円(税込み)